

大岡昇平與菲律賓戰爭遺跡拜訪之旅： 〈再赴民都洛島〉之考察

林姿瑩*

摘要

大岡昇平（1909-88，Ōoka Shōhei）於1944年被日本政府徵召入伍，派駐於菲律賓民都洛島（Mindoro），隔年成了美軍戰俘，在菲律賓萊特島（Leyte）的收容所待了一年。回到日本的大岡昇平，以此戰爭經驗創作了《俘虜記》（1952）、《野火》（1952）等戰爭小說，並在1967年參加了菲律賓戰爭遺跡訪問團，再度踏上了民都洛島。他將這趟旅途見聞寫成一篇中篇的紀行文〈再赴民都洛島〉（1969）。途中「我」不僅追悼死亡的戰友們，也再次確認了自己的戰爭記憶。此外，文中還透過菲律賓今昔對照，思考戰爭遺緒，包括戰後菲律賓的社會現況、日本與菲律賓之國際關係等。〈再赴民都洛島〉為大岡昇平戰爭系列作品之一，但前行研究資料不多，且偏重於作品中情感描寫之分析。本論文將補足前行研究對時代背景考察的不足之處，整理大岡昇平參加菲律賓戰爭遺跡訪問團之經過，進而分析大岡的書寫策略與創作意圖，指出〈再赴民都洛島〉異於其他戰爭遺跡紀行文之特色與意義所在。

關鍵詞：大岡昇平、第二次世界大戰、戰爭書寫、戰爭遺跡訪問團、〈再赴民都洛島〉

* 樹人醫護管理專科學校應用日語科專任助理教授

A Study of Ōoka Shōhei's "Mindoro Revisited" and the Relics of the Pacific War in the Philippines

LIN, Tzu-Ying*

Abstract

Ōoka Shōhei (1909-88) was enlisted by the Japanese government during the Pacific War in 1944, and his regiment was stationed in the Mindoro Island of the Philippines. Back in Japan, he produced war novels based on his war experience. In 1967, he joined a group visiting the war relics in the Philippines, thus making a return to Mindoro. Later, he recounted this experience in his travelogue "Mindoro Revisited" (1969). In this work, Ōoka's first-person narrator remembers his comrades and reconfirms his war memories. In addition, by comparing the past and present of the Philippines, this work reflects on the legacies of the war, including the current conditions of post-war Pilipino society and the relationship between Japan and the Philippines. This paper will make up for the deficiency in the investigation of its historical backgrounds by providing an account of the process of Ōoka's participation in the war relic visiting group. It will analyze Ōoka's approach to and objectives of "Mindoro Revisited," thereby identifying the characteristics and significances that distinguish "Mindoro Revisited" from other war relic travel writings.

Keywords: Ōoka Shōhei, World War II, war writing, war relic visiting group, "Mindoro Revisited"

* Assistant Professor, Department of Applied Japanese, Shu-Zen Junior College of Medicine and Management.

大岡昇平とフィリピン戦跡訪問 ——「ミンドロ島ふたたび」に関する一考察

林 姿瑩*

要旨

大岡昇平（1909-88）は 1944 年に補充兵として徴兵され、フィリピンのミンドロ島に派遣された。こうした戦争体験を基にして、戦場から帰還した大岡はまず『俘虜記』（1952）、フィクションの『野火』（同）そして短編戦争小説を発表し、自分の体験を描くだけではなく、敗走の絶望感をレイテの兵士に託してフィクションをも書き上げた。1967 年のフィリピン戦跡慰問団に加わり、再びレイテ島とミンドロ島を訪れていたのであった。この再訪体験は「ミンドロ島ふたたび」（1969.8）という紀行文的な長編小説に描かれている。戦地／死地への再訪という行動は、大岡の戦争体験において一種の再確認や決着という効果があるはずであり、それがもたらした意味を無視することはできない。本論文は先行研究の成果を踏まえ、遺骨収集と慰霊巡拝という戦後処理の動きに注目し、大岡昇平が遺族としてではなく、当事者としてかつての戦地／死地を再訪したことの意味を「ミンドロ島ふたたび」を通して明らかにする。

キーワード：大岡昇平、第二次世界大戦、戦争描写、戦跡慰問団、「ミンドロ島ふたたび」

* 樹人医護管理専科学校応用日語科専任助理教授

大岡昇平とフィリピン戦跡訪問 ——「ミンドロ島ふたたび」に関する一考察

林 姿瑩

はじめに

大岡昇平(1909-88)は、自分の戦争体験を活かして書き上げた『野火』(1952)、『俘虜記』(1952)をもって名を挙げた作家である。1967年3月、大岡は戦跡慰問団に参加し、フィリピンのレイテ島とミンドロ島を再訪した。当時『中央公論』に連載中の『レイテ戦記』のための取材と確認、およびわが駐屯地ミンドロ島で死んだ戦友の霊を葬るのが目的¹であるという。ミンドロ島は大岡がかつて兵士として半年駐屯した島であり、レイテ島は俘虜として収容所で過ごした島である。訪問地から戻ってすぐその経緯や見聞を新聞や雑誌に投稿し、合わせて五篇の紀行文を発表した²。

その後、約2年半に渡った「レイテ戦記」(1967.1~69.7)の連載が終った翌月、大岡は「ミンドロ島ふたたび」(『海』1969.8)を書き上げ、2年前のフィリピン再訪体験についてもう一度語った。前記のどの紀行文よりも紙数(250枚以上)が費やされ、初出誌の「編集後記」では、「さきに『中央公論』誌上において完結した『レイテ戦記』と対をなす作品で、大岡昇平氏の戦争文学に対する帰結点であるとおもいます」と高く評価されている。また、同年12月に単行本に収録された時、作品タイトルがそのまま書名となった点から、「ミンドロ島ふたたび」も大岡の戦争文学において重要な作品であることがわかる。

¹ 大岡昇平「フィリピン紀行」『大岡昇平全集』第20巻、筑摩書房、1995、p.555。

² 発表順に「フィリピン紀行」(『朝日新聞夕刊』1967.4.13~15)、「昔ながらの草の丘」(『朝日新聞(朝刊)』1967.4.27)、「『野火』の島を訪ねて」(『婦人公論』1967.6)、「ダナオ湖まで」(『別冊文芸春秋』1967.6)、「『俘虜記』のミンドロ島を往く」(『丸』1967.7)である。ちなみに、「『野火』の島を訪ねて」と「『俘虜記』のミンドロ島を往く」は『大岡昇平全集』第20巻「紀行・評論」に収録されるのに対し、「ダナオ湖まで」は、「ミンドロ島ふたたび」と共に『大岡昇平全集』第10巻「小説IX」に収録されている。

先行研究を顧みると、同時代評では「絶望的な戦争の犠牲となった死者への鎮魂歌、戦友たちの怨霊をしずめるために、生き残った人間が書いたフィリピン再訪記」³という点で作品の特徴が取り上げられ、生き残った人が戦死した戦友たちに捧げる作品として捉えられている。また、作品の構成も論者の注目を集め、感情を訴える抒情的な部分と、戦史を紹介する記録的な部分は作品の中で「統一されている」⁴ことが指摘され、とりわけ大岡の戦争小説の中ではあまり見られない死者の霊に「呼びかける」文章が大いに議論されている。中野孝次はこの論を引き継いで、「圧倒的な感情溢出の部分」は「ミンドロ島ふたたび」の基調をなしていると述べ、大岡の戦争文学の描写における初めての「感情的湧出」としてこの作品を位置付けた⁵。

こうした「感情的湧出」に重点を置いた論調に対して、花崎育代は「いわゆる悲痛な感情の吐露が全六章のうちまず第一章に集中的にあらわれて」おり、「その調子がエンディングまでひきのばされるわけではない」と反論している。「問題はなぜ『一貫しない』で『漫然たる紀行』のように『すかされた』ような印象をもたせるものとして書かれてしまったのか」(pp.225-226)と疑問点を提示した上で、氏はテキストに何箇所も使われる「われわれ」という表現に着目して作品を再検討した。その結論として、これは「私」の「『解放』されない『情念』」、「カタルシスの不可能性」を提示する作品として読まれるべきだと指摘している。

³ 佐々木誠「[本の素顔] 死者鎮魂の紀行文——『戦記より気軽に戦争描く』『読売新聞』朝刊、1970.1.16、p.20。

⁴ 「冒頭の『詩のようなもの』、レイテ島へ飛ぶ機中で特攻隊の若者の霊に呼びかけるくだり、ミンドロ島の山中で死んだ戦友たちの霊に祈る個所——この三つの部分は、紀行文にふさわしい報告調の乾いた文章でほぼ統一されている」。菅野昭正「感傷を拒む死者への鎮魂 大岡昇平『ミンドロ島ふたたび』」『文芸』1970.2、p.178。

⁵ 中野孝次「解説」『ミンドロ島ふたたび』中公文庫、1976.6 初版、1996.5 七版、p.254。「大岡昇平がこのようにはげしく、手放しで感情的湧出を記したのはおそらく初めてであろう。(中略)わたしは『ミンドロ島ふたたび』を初めて読んだとき、文中の圧倒的な感情溢出の部分にはげしく動かされ、冷静的確な紀行文的記述の確かさにまで目がいかなかったのだが、今度何度目かに読み直して、その日常的リアリズムの堅固さに目をみはる思いがした。」(pp.254-255)

カタルシスの不可能性。それはフィリピン人との“和解”が簡単にはあり得ない、という意味だけでは無論ない。戦地再訪によっても「私」の戦後は大団円的には終わらない、ということなのであり、それがつよく提示されているのである。⁶（下線引用者。以下同様。）

作品では、自分が元兵士であることを明かしてはいけないとフィリピンの警察に注意されることや、「西瓜を切るより、そこにいる日本人の頭を二つに切りたい」⁷とフィリピン人の店員に言われることが描かれている。これらのエピソードから考えると、確かに「私」の「情念」の「解放」も、日本人とフィリピン人の「和解」もそう簡単にありえるものではない。1956年の日比国交復活以来、遺骨収集や戦跡慰問が頻繁に行われていくはずだったが、何故あえて「大団円的に終わらない」戦跡訪問紀行文「ミンドロ島ふたたび」が書き上げられたのであろうか。この問題について、戦跡慰問団の派遣経緯及び当時の社会状況という二つの角度から検討したい。

本論文ではまず海外戦跡慰問旅行を中心とした時代背景を調査し、先行研究で不問に付されてきた大岡のフィリピン再訪の背景をまとめる。その上で、「ミンドロ島ふたたび」とそれに先行した五篇の紀行文を分析する。元兵士の大岡にとって、かつての戦地／死地を再び訪ねた意味を問いつつ、「ミンドロ島ふたたび」の位置付けを明らかにする。

1. 1967年までの遺骨収集状況とフィリピン

1.1. 太平洋地域全体の場合

アジア太平洋戦争は多数の犠牲者を出しており、日本の戦没者数は約310万人で、このうち日本本土以外の各戦域での戦没者は約240万人（軍人軍属等約210万人と一般邦人約30万人）である。地域別

⁶ 花崎育代「第一〇章 カタルシスの不可能性——「ミンドロ島ふたたび」」『大岡昇平研究』双文社、2003、p.243。

⁷ 大岡昇平「ミンドロ島ふたたび」第六章。引用は、前掲『大岡昇平全集』第10巻、p.431に拠った。

に見ると、フィリピンが 51 万 8000 人で最も多い。その次は満洲国以外の中国本土の 46 万 5700 人、中部太平洋（ミクロネシア）の 24 万 7000 人である⁸。戦争が終わった当初、日本は GHQ による占領時代に入り、兵士の復員や外国在留邦人の引揚げといった多くの戦争処理の問題を抱えていたため、海外戦没者数は精確に把握できず、遺骨は主として復員者や引揚者によって持ち帰られた。1952 年の時点で南方諸地域における未送還遺骨は 80 万柱以上あると推計されており、そのうちフィリピンでは 38 万柱の遺骨がまだ収容されておらず、その未送還率は 81.6%とされ⁹、ほとんど送還されていない状況にあった。人が足を踏み入れられない密林や洞窟では、戦死者たちの遺骸の収集は極めて困難であったことが推察できる。

海外戦没者の処理問題は、1951 年 9 月のサンフランシスコ平和条約調印を機に、本格的に取り上げられるようになった。戦後の国際情勢や政治といった要因から遺骨収集の手続きが複雑だったため、厚生省引揚援護局は外務省と協力し、まず 1952～53 年の間、当時アメリカ管理下の地域（硫黄島、沖縄、そしてサイパン島、テニアン島、グアム島など）に順次遺骨収集団を派遣した。収集団は政府職員・遺族代表・宗教家代表・医師・作業員によって構成され、2～3 カ月間運輸省の船（大成丸や銀河丸）で各戦域を廻り、遺骨調査・収集また追悼行事を行った。50 年代、政府が実施した大規模な遺骨収集作業を下記の表にまとめる¹⁰。

【表 1】1950 年代日本政府が派遣した遺骨収集団

期間	遺骨収集団の派遣地
1952.1～4	米国管理下地区：沖縄・硫黄島
1953.1～3	米国管理下地区：南鳥島、ウェーキ島、サイパン島、テニアン島、グアム島、アンガウル島、ペリリュー島

⁸ 社会・援護局事業課事業推進室「戦没者慰霊事業の実施状況」（2019.8）、https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132980_00001.html（2020.11.29 閲覧）。

⁹ 浜井和史『海外戦没者の戦後史：遺骨帰還と慰霊』吉川弘文館、2014.5、pp.94-95。

¹⁰ 前掲浜井和史『海外戦没者の戦後史：遺骨帰還と慰霊』よりまとめたものである。

	及び硫黄島
1953.8	米国管理下地区：アッツ島
1955.1.12～3.18	英豪地区：東部ニューギニア・ソロモン諸島方面
1956.1.24&2.6 ～3.15	ビルマ・インド方面
1956.6.20～8.23	西部ニューギニア・北部ボルネオ及びモルッカ諸島方面
1958.1.20～3.11	フィリピン（ルソン、ビサヤ諸島及びミンダナオ島）

これ以外の収骨作業という、主として遺骨が発見され次第、大使館や何らかの手段を通して日本に送還されるというやり方であった。このように戦後7年目にしてようやく海外戦没者の遺骨を迎えることができ、収骨は遺族を始めとする当時の民衆の一大関心事となった。最初の公式遺骨収集団を例に挙げると、収集団は1952年1月に当時アメリカの統治下にあった硫黄島に派遣された。これについて各紙が大きく報道している。例えば『毎日新聞』（日刊、1952.1.31）は大きな横見出しに「硫黄島に英魂を悼む」、縦見出しに「道路埋む白骨の砂」と掲げ、1面は全て関連記事であった。

こうした政府による遺骨収集事業に対して、大岡は当然の事ながら関心を寄せている。硫黄島の遺骨収集のことで世間が沸き立っている最中、大岡は「二万人の死者より二十人の生者を」（『東奥日報』1952.2.8）という文章を発表して、民衆及び政府の注意を喚起した。

二万人の遺骨を探すために僧となった元部隊長が、GHQの好意によって硫黄島へいった。ジャーナリズムは大きく扱い、こわれたトーチカと骸骨写真が飾られた。遺族も感慨を新たにしたのであろう。／これはよいことだ。しかし私の考えでは死者はどうせ帰らぬ人である。二万人の死者より二十人の生者を大切にしなければならぬ。／ミンドロ島に限らない。グアム島その他南方各地に、終戦を知らず、あるいは知っても恐怖と命令（？）によって、投降することができない人達の数、相当の数に上るであろう。（中略）繰り返す、二万人の死者より、二十人の生

者が、遺族にとっても大事である。¹¹

海外で戦死した国人の遺骨の収集や慰霊は大事だが、戦争でまだ帰還できない生者の救出を最優先すべきだというのが戦争直後の大岡の論調であった。

戦後処理の一環であるはずの遺骨収集問題に関して、政府側の立場は非当事者的であり、遺族の協力者という以上の振る舞いを見せてはいない傾向が窺える。1956年に西部ニューギニア方面への派遣団に参加した「政府代表」の外務省事務官竹中均一は、「南海の遺骨収集紀行」において、冒頭で「西部ニューギニアと北部ボルネオ方面の日本人戦没者の収骨と追悼のため、九千万同胞の祈りと十数万遺族の悲願を乗せた大成丸」が出発したと述べ、末尾部には「戦場に倒れた英霊の姿をこの眼で拝し、遺族の心情に思いを到す時、生命を存らえ得たわれわれは、現在の心の持ち方や日々の行動に対して、“これで良いのか”と強く反省せざるを得ない」とあるが、これに次ぐ段落では「われわれ日本人にとり、移民候補地として全く垂涎措くあたわざるところ」、「今回の現地視察の結果、大いに日本商品の進出の余地あることも判明した」¹²と述べている。戦争を引き起こし、多くの兵士を派遣し戦死させたという政府としての責任感や反省は読み取れない。メディアの報道においても、あたかも「遺骨や遺留品の収集は遺族の強い希望であった」¹³ため、遺骨収集を計画したわけだというニュアンスである。先の大戦と距離を置き、政府側・メディア側はあくまで受身的な立場にあったと考えられる。

1.2. フィリピンの場合

サンフランシスコ講和条約と日比賠償条約が 1956 年にフィリピ

¹¹ 引用は、前掲『大岡昇平全集』第14巻、pp.128-129に拠った。

¹² 竹中均一「南海の遺骨収集紀行」『月刊インドネシア』1956.11。

¹³ 「フィリピン諸島に眠る日本軍将兵の遺骨を収集する計画について、厚生省では三十日最終案を決定、大蔵省との予算折衝に入ることになった。(中略)フィリピンで戦死した日本軍人は陸軍三十五万人、海軍十二万人だが、そのほとんどが現地に放置されており遺骨や遺留品の収集は遺族の強い希望であった。」『朝日新聞』(東京/朝刊)1957.12.1、1面。

ンの上院によって批准されたため、フィリピンでの遺骨収集は他の太平洋地域より遅く実施され、初めて公式的に行われたのは 1958 年 1 月であった。出発した銀河丸はルソン、ビサヤ諸島・ミンダナオ島を中心に遺骨を集めたが、ミンドロ島には寄らなかった。太平洋地域における大規模な遺骨収集事業について、政府はこのフィリピンでの収骨が終わると共に一応収骨を終えたという見解を示した¹⁴。しかし、フィリピンの場合は 2561 柱しか収容されず、未送還遺骨は 47 万柱もある¹⁵。1965 年にインドネシア政府の許諾を得て初めてインドネシアでの収骨作業を実施することができたが¹⁶、作業の終了後、メディアも「南方の遺骨収集おわる」¹⁷という認識を示している。送還されていない遺骨がまだ数多くあるにもかかわらず、政府の南方地域での遺骨収集を切り上げようとする考えが窺える。

政府の消極的な対応にひきかえ、1964 年 4 月から一般民衆の海外渡航が自由になるにつれ¹⁸、遺族会や戦友会が旅行会社と連携して海外戦跡慰問団を続々と企画していき、民間による戦跡訪問は盛んになった。1960 年に日比友好通商航海条約が調印されたが、その翌年フィリピンで政権交代が起き、フィリピンの上院は条約の批准を拒否した。とはいえ、62 年に日本の皇太子夫妻がフィリピンを訪問したこと、67 年のバターン「死の進行」25 周年記念式典に日本大使が初めて招待されたこと、66 年にフィリピン初日本研究プログラムが設立されたことなどといった文化的な交流は進められていく。

マッカーサー訪問の翌年、日本の皇太子もフィリピンを訪問し、最初は距離感があったものの温かい歓迎を受けた。二十年の月日がたち、恨みは残りつつも、多数は日本の戦争世代と新しい

¹⁴ 浜井和史「戦後日本の海外戦没者慰霊：一九五〇年代遺骨収集団の派遣経緯と「戦没日本人の碑」の建立」『史林』2008.1、p.216。

¹⁵ 「比国の遺骨 47 万柱」『朝日新聞』（東京／朝刊）1957.12.1、1 面。

¹⁶ 期間は 1964.12.21 から 1965.1.26 まで（先発隊は 12.11～2.6）である。

¹⁷ 「82 体、無言の帰国 南方の遺骨収集おわる」『朝日新聞』（東京／朝刊）1965.2.7、15 面。記事の中に「これで南方地域の遺骨収集は全部終わったわけだ」と書いてある。

¹⁸ 「旅行に関する略年表」『数字が語る旅行業 2020』（デジタル版）日本旅行業協会広報室、2020.6、p.78。

世代とを区別して考えることができた。¹⁹

つまり、60年代とは日本とフィリピンの関係が少しずつ修復されていく模索期にあると言える。こうした時期を背景にして、日本民間の遺骨収集・戦跡慰問団はフィリピンに出発することとなった。1967年までのフィリピン遺骨収集・戦跡慰問団の訪問を下記の表にまとめる。

【表2】1967年までのフィリピン遺骨収集・戦跡慰問団

期間	団名	主な訪問地域	その他
①1958.1.20 ～3.11	遺骨収集政府 派遣団（銀河 丸）	ルソン、ビサ ヤ諸島・ミン ダナオ島	団長稲葉柁。
②1966.2.21 ～26	第一回フィリ ピン戦跡訪問 団	ルソン島	フィリピン戦跡訪問団事 務局主催、局長梶原讓、 団長小堀虎二郎、計47名。
③1966.6.4～ 10	第二回戦跡巡 拝団	ルソン島	遺族会主催、団長岩谷源 治、計127名。
④1966.8.11 ～18	日米合同レイ テ遺骨収集団 （先発隊は8.1 ～8.31）	レイテ島	神子清とJ・トーランド 主催、計49人。遺骨は護 衛艦「あかづき」で9.24 に送還。
⑤1966.11.26 ～12.5	第四次比島戦 跡訪問団	パグダン・マ ゴク地区	団長大河内一郎、計13 名。
⑥1967.3.18 ～26 (3.18～31)	第二回フィリピ ン戦跡訪問団 大岡昇平参加	レイテ島、ル ソン島 レイテ島、ミ ンドロ島	事務局長梶原讓、計25名 +大岡昇平ら3名。 中央公論社の高橋善郎と 写真家池利文と行動する。

¹⁹ リカルド・トロタ・ホセ著、佐竹眞明訳「第1章 フィリピンにおける戦争記念碑と記念式典——踏査的観察」『フィリピンと日本の戦後関係』明石書店、2011、p.44。退役していたマッカーサー（Douglas MacArthur、1880-1964）が米国の代表としてフィリピンの島々を公式的に訪問したのは1961年である。

①は政府による派遣団だが、②以降は主として民間団体が企画したものである。この表は『朝日新聞』の記事に基づいて作られた初歩的なまとめであり、実際にフィリピンに行った慰問団はこれより多いと考えられる。例えば1947年に設立された「日本遺族厚生連盟」（1953年「財団法人日本遺族会」に改名された）や56年に発足した日比慰霊会といった民間組織は、日比両方の旅行会社と提携し、フィリピンでの遺骨収集・慰霊訪問に大きく関与した。

1967年に58歳を迎えた大岡が参加したのは、梶原譲（元フィリピン在留邦人遺児）が主催した二回目のフィリピン戦跡慰問団である。梶原譲が引率した第一回フィリピン戦跡慰問団について、特筆することがある。66年に当慰問団は民間団体でありながらも現地の知事だけではなくマルコス大統領の招待まで受けて官邸を訪問したのである²⁰。戦後21年目という節目を迎えたタイミングにおいて、これは日比の平和友好的な関係を示している一例だと言えよう。

大岡が参加した慰問団自体のスケジュールはレイテ島四泊とマニラ三泊である。しかし、大岡は四日目の午後から中央公論社の高橋善郎と写真家の池利文二人と共に別行動をし、その後更に三人の現地PC（国家警察）と共に6人でミンドロ島を回った。具体的なスケジュールを下記の表にまとめる。

【表3】大岡昇平が参加したフィリピン戦跡慰問団の日程概要²¹

日付	フィリピン戦跡慰問団のルート	大岡の訪問ルート
3/18 土	10:30-14:00、羽田空港→ルソン島のマニラ	同左
3/19 日 レイテ	マニラ→レイテのタクロバン→パロ近郊の十字架山→ダガミ(町のはずれで慰霊祭)→ブラウエン(町役場で慰霊祭)	同左

²⁰ 梶原譲編『第一回フィリピン戦跡訪問記念集』フィリピン戦跡訪問団事務局、1966.6.15。

²¹ 前掲『大岡昇平全集』第23巻の「伝記年譜」及び「ミンドロ島ふたたび」の記述からまとめたものである。

3/20 月 レイテ	タクロバン→パロ(慰霊祭)→ハロ→ トゥンガ→カリガラ→カポーカン→ク ラシアン→リモン峠(慰霊祭)→オ ルモック	同左
3/21 火 レイテ	オルモック港(栈橋で慰霊祭)→パ ラナス川(河原で慰霊祭)→ダムラ アン→カンギポット遥拝、マタコブの 付近の私有地に新しい慰霊標を 建て慰霊祭を行う→オルモック	同左 慰問団と別れ、ビリヤバでブカブ カ山登山
3/22 水	オルモック→タクロバン	オルモック→パストラーナ、ダナオ 湖→タクロバン
3/23 木	昼、タクロバン→マニラ	同左
3/24 金	ルソン島	ミンドロ島訪問のため準備する
3/25 土	ルソン島	ミンドロ島訪問のため準備する
3/26 日	マニラ→羽田空港	ミンドロ島訪問のため準備する
3/27 月		マニラの国家警察司令部に出向 く
3/28 火		6:30-7:25、マニラ→サンホセ サンホセ町長訪問→かつての駐 屯地であるセントラル→鋸山(バト 山)眺望→サンホセ
3/29 水		カミナウエ→鋸山登山(マンギャン 人と食事する)→サンホセの市場
3/30 木		7:25、サンホセ→マニラ、タール湖 へ一日ドライブ
3/31 金		20:00、マニラを出発

以上のように、1945～67年までの日本の太平洋戦場における遺骨収集及び慰問の状況を概略的に振り返った。50年代は日本政府による遺骨収集団が中心となり、60年代に入ってからには民間の戦跡慰問団が、小規模ではあるが盛んに活動していた。帰還の問題にも遺骨収集の問題にも、大岡は常に関心を寄せており、フィリピン戦跡慰問団にも加わり、比較的行きにくいミンドロ島のサンホセまで行こ

うとしているのである。大岡の訪問ルートによると、死者への慰霊だけではなく、山に登り地形や戦場の位置関係を確認することも訪問の目的の一つである。約二週間の慰霊の旅から帰ってきた大岡が、すぐに五篇の文章を書き上げたことは前述した通りである。次章から、当時のフィリピン戦跡訪問の紀行文を検討する。

2. フィリピン戦跡紀行文の概観

梶原譲が引率した第一回慰問団は『第一回フィリピン戦跡訪問記念集』という45頁の冊子を制作した²²。亡くなった人への思いや旅行中の所見所感を記す文章が主となるが、マルコス大統領をはじめフィリピン人に感謝の意を表しているくだりもいくつもある。

実は戦後始めての事であるし、心配していた対日感情も、この様に大統領を始め、我々の旅行範囲では非常によかった訳で、今後安心して旅行出来る事と思います。²³

行程の最後のマニラではマルコス大統領に逢うことが出来、一人一人固く手を握り「生きている人達が戦死された人達を慰霊するのはあたりまえです。又責任があります。フィリピンは喜んで皆様を受け入れます」と有難い御言葉を頂き、大変感激致しました。²⁴

このように、フィリピン人の反日感情を心配しながら出発したが、現地では彼らから好意的な協力を得ることができ感謝しているという文章や、フィリピンの役人の言葉を引用している文章が新聞から見られる。

岩谷源治団長の話 七十歳を越える高齢者が多かったが、フィリピン側当局の好意と天候にめぐまれ、予想以上に実のある旅行をすることができた。とくに、地方の小さな村の住民たちの

²² 記念集は24篇の感想文、日誌、団員名簿からなる。

²³ 小堀虎二郎「フィリピンの戦跡を訪ねて」、前掲『第一回フィリピン戦跡訪問記念集』、p.4。

²⁴ 梶原勝代「25年ぶりのマニラ」、前掲『第一回フィリピン戦跡訪問記念集』、p.37。

心暖まる協力には胸を打たれた。²⁵【ルソン島訪問】

この日、一行を迎えたレイテ州知事ロムアルテス氏が行なった演説も印象深いものだった。「日比両国民の間で抜きさしならなかった敵意は今日、ここで消滅したと信じます」と彼はいった。

²⁶【レイテ島訪問】

かつての敵国がまたやってきて自分の土地で敵の遺骨を収集したり慰霊祭を行ったりすることに対して、フィリピン住民は特に反感を見せず、フィリピンの役人でさえ協力的で友好的であるというイメージが日本の記事で繰り返し報じられている。言い換えると、日本の世論ではフィリピンに好意を寄せているとわかる。

大岡昇平が書いた紀行文を見ると、フィリピン人の「友好的」な一面は言及されているが、「大変感激致しました」といったような感謝の言葉はほとんど見当たらないのである。「友好的」なイメージについて書いたのは「フィリピン紀行」（1967.4.13～15）と『『野火』の島を訪ねて』（1967.6）の二篇だけである。二篇に共通して描かれているのは、慰霊祭を行うために町役場の二階を貸してくれたレイテ島ブラウエンの町長及び町民についてである。

ダガミ町で勝手に祭を行うことは住民に対して遠慮がある。（中略）ただしブラウエンの町長は慰問団に協力的で、米軍の重機の弾痕の残っている町役場の二階で慰霊祭を行なった。（中略）比島人と結婚した中村秀子さんが住んでいて、町民、特に子供たちは友好的である。（「フィリピン紀行」）²⁷

ダガミ町内では、人が寄ってきて、邪魔が入るおそれがある。遠慮もあるので、人里離れた野原の中で慰霊祭を行わねばならない、ということが、ひとしお哀感をそそる。／ただしそれから南方十キロのブラウエンの町では、町長が友好的であり、町

²⁵ 「住民の協力に感激 ルソン島戦跡参拝団が帰国」『朝日新聞』（東京・朝刊）1966.6.11、p.14。

²⁶ J・トーランド「憎しみも消えて “米人も参加” にうなづく島民」『朝日新聞』（東京／朝刊）1966.8.19、p.14。

²⁷ 引用は、前掲『大岡昇平全集』第20巻、p.557に拠った。

役場の二階で慰霊祭を行うことが出来た。(中略) 恐らくこの辺りの日本兵は敗退しただけで、あまりひどいことをしなかったであろう。タクロバンとは違い、山中の町であるから、人情も違うのである。／ブラウエン町民が友好的である理由がもう一つあった。町に比島人と結婚した日本女性がいることである。中村秀子さんは沖縄の国頭の生れだが、昭和二十九年フィリピン人と結婚してこの町に来た。三人の子供がある。(『野火』の島を訪ねて)²⁸

「フィリピン紀行」における「特に子供たちは友好的である」という一文は、戦後生まれの世代が直接戦争を体験していないため比較的友好的だという意味を暗示していると考えられる。そして、『野火』の島を訪ねて」では、ブラウエン町民の友好的な一面が書かれているが、その理由について「山中の町である」ことと「町に比島人と結婚した日本女性がいること」が付け加えられている。つまり、ブラウエンを友好的な町たらしめる理由を具体的に分析している点が特徴的である。

更に当時の他の紀行文と比べて、大岡の文章で批判が書かれている点も独特である。日本の民間による遺骨収集の正当性に疑問を呈して、批判的な意見を示しているのである。前掲「フィリピン紀行」の末尾では、以下のように締めくくっている。

政府は昭和三十二年の銀河丸をもって、南方戦線の山野に残る遺骨収集を打ち切ったが、これは遺族の感情では適切な処置ではなかった。政府がなにもしないから、民間の旅行社によって組織された戦線巡礼団に遺族が参加し、発見された遺骨、破れた鉄帽、認識票、小銃、弾丸の破片に涙を注ぐのである。／民間でやることであるから、著しく感情的で不正確である。(中略) 結論的にいえば、慰霊碑は、日比政府間の話合いにより、代表的なものをマニラに一つ建てるのが、最も望ましい。²⁹

²⁸ 引用は、前掲『大岡昇平全集』第20巻、p.570に拠った。

²⁹ 引用は、前掲『大岡昇平全集』第20巻、pp.558-559に拠った。

「民間でやることであるから、著しく感情的不正確」という一文は、民間慰問団の必要性をむしろ根本的に否定していると言える。フィリピン人が友好的で協力的かどうかを問う以前に、まず民間慰問団の存在自体を見直すべきだという主張である。

大岡が書いた五編の紀行文は訪問地によって書き分けられているだけでなく、それぞれ主題も異なっている。レイテ島の訪問経緯を時系列に沿って詳細に記していく「フィリピン紀行」と違い、『『野火』の島を訪ねて』は団員やフィリピン在住の日本人、二世の描写に重点を置いた点が目立っている。そして、小説の部類として扱われた「ダナオ湖まで」(1967.6)という短編は、前半は兵士であった「私」とレイテ戦の因縁、後半は慰問団と別行動したダナオ湖への往復経緯(登山体験)が語られている。

一方、ミンドロ島の戦場再訪経緯については、「昔ながらの草の丘」(1967.4.27)ではサンホセでの一日目がテーマとなり、戦時中の情景と比較して変わったところと変わっていないところが記され、末尾に「二十三年後、私だけサンホセを再訪して、この美しい風景を見ているという不思議」³⁰とあるように、かつての戦場を再び訪ねることができたことの「不思議」が述べられている。『『俘虜記』のミンドロ島を往く』(1967.7)も似たような書き方で、前掲の文章と重なっている内容が多くある。ただし末尾に近い段落では、かつてと変わらない美しい風景と再会できた不思議な気持ちの代わりに、「二十三年たってこの風景に再会し、昔と同じくらい強く感動出来ないことに私はひそかに悩んでいた」³¹と述べられている。フィリピン人に関する描写が少なく、回顧録のようにあくまで筆者自身の内面に焦点を向けているのである。

以上のように、大岡が発表した五篇の短編紀行文は、重なる内容はあるものの、主題別に書き分けていることがわかる。旅行先から帰ってきたばかりという時期に、自分の所見所感を一つの文章にま

³⁰ 引用は、前掲『大岡昇平全集』第20巻、p.564-565に拠った。

³¹ 引用は、前掲『大岡昇平全集』第20巻、p.579に拠った。

とめて書くのではなく、思いついたことをそのまま短編にして発表すると推測される。また、フィリピンへ好意を寄せている同時代の紀行文とは違い、大岡の紀行文は一方的に友好的なフィリピン像を作り上げず、感謝の言葉も控えていると言える。その上、民間の海外戦跡慰問団の正当性の問題を問いただしたりすることで、当時の世論に対して戦跡訪問の意味の捉え方を別の角度から提示しようとする執筆意図が窺えよう。

2年後に『レイテ戦記』連載が終わり、大岡はもう一度フィリピン戦跡慰問の旅について執筆し、中編「ミンドロ島ふたたび」(1969.8)を発表する。大岡がどのようにフィリピン戦跡慰問の体験をまとめるのかという問題提起を切り口に、次章でテキストを考察する。

3. 「ミンドロ島ふたたび」のモチーフ

「ミンドロ島ふたたび」(1969.8)は六章からなり、主人公「私」の現地での見聞(紀行の部分)と、25年前の自分の戦争経験及び当時の戦況(戦争の部分)が交錯しながら書かれている。一見単純な回顧録のようだが、入り混じったこの二つの部分は実は二つのモチーフで書かれていると考えられる。

3.1. 生き残った者の役目——戦争を知ること

作品の書き出しは、1958年に最初のフィリピン遺骨収集団が結成され出発することから始まり、参加できなかった自分の心情を描いている。そして、10年後『中央公論』に『レイテ戦記』を連載している時の感想に移り、自分が参加した「第二次戦跡慰問団」の出発をめぐる描写はその後となる。何故最初から本題に入らず、このような遠回りした書き方を取っているのかと考えると、冒頭部には作品の執筆動機が書かれているからだと考えられる。

ミンドロ島はレイテ島の次に米軍が上陸した島であるが、激しい戦いがなく、「日本軍にとっては戦略的に重要性がなかった」(二)ため、ミンドロ島戦史を中心とした史料は少ない。ところが、『レイ

『戦記』に関する資料を調べているところ、実際にミンドロ島がレイテ島と同じ大きな作戦計画の下に置かれていたことに「私」は気づいたのである。

（前略）最近漸く各種資料が出版され、レイテ島の戦闘の全貌がわかって来た。同時に、私は自分の戦ったミンドロ島の戦闘についても、一兵士にはわからなかったこと、帰国してから回想を書いた時にも、知ることが出来なかった多くのことを知った。（一）

一兵士として周りに起こった戦況を把握するのは難しいことである。22年かけて戦争に関する資料を調べた成果として、「知ることが出来なかった多くのことを知った」。そこで、かつて自分が馬鹿にしていた日本軍の戦い方は、実は一つ一つに意味があったことを知り、自分の生意気さにあきれたり、恥じたりするという文が書かれている。

下駄ばきのちゃちな偵察機で、一度空襲を受ければひとたまりもない。（中略）南方から逃げ出して来たのだろう、と思っていた。逃げたところで、逃げおおせるものでもないのに、ばかなことをするものだ、と思っていたが、記録を調べると、これは八月一日佐世保から南フィリピンに展開した海上護衛航空隊である。（中略）帝国陸海軍は、一兵卒が現地で当推量で馬鹿にしていたよりは、大きな構想の下に戦っていたことを知ったのである。（中略）われわれは敵がここをレイテ島の次の上陸地に選ぼうとは、思っても見なかった。うまく行けば戦いはわれわれの上を通過して、ここは永久に忘れられた戦場になるだろう、と考えていたのだが、戦史を調べると事態はそう簡単でない。

（中略）歩兵にはぴんと来ないが、航空作戦としては最も上陸可能性の多いところだったのである。（一）

「帝国陸海軍は、一兵卒が現地で当推量で馬鹿にしていたよりは、大きな構想の下に戦っていたことを知ったのである」（一）とあるように、一兵士乃至個人の経験から戦争の全体像をつかむことの限界

性を示し、そうした立場から戦争を認識する時、事実を誤解する恐れがあると暗示している。

このように第一章は、戦争体験について「私」が思い込んでいたことと調べて初めて知ったことを対比させながら、戦争の実際のいきさつを説明している。そして第二章以降は、表4のように更に参考資料を挙げてその内容を引用するのである。

【表4】「ミンドロ島ふたたび」で言及された参考資料の一覧

初出章	参考資料（引用順）
第2章	サミュエル・モリソン『海戦史』1963 ジャン・ヴァルティン『昨日の子供達』1946 石田幹之助『南海に関する支那史料』1945.4 パウロス『フィリピン史』（法貴三郎訳、1942） アル・ヘルナンデス『Bahála Na（バハラ・ナー—フィリピンを解放した諜報隊のトルーストリー）』1960 坂邦康編『比島戦とその戦争裁判』1967 トラヴィス・インガム『潜水艦による出会い』1945 ホセ・ドロマル『パナイの戦い』1952
第3章	ポメロイ『ゲリラ・反ゲリラの闘い』1964
第4章	モリソン『米国海軍第二次大戦戦史』13巻「フィリピン解放」、1947-62
第5章	太平洋協会編『フィリピンの自然と民族』1942 山本繁一『ジャングル生活12年』1957 米陸軍省戦史室篇『第二次大戦日録』1960

第二章はマニラでサンホセ町への出発を準備することが描かれているが、六章の中で最も多くの参考資料が挙げられている章である。とりわけ戦時中、フィリピンとアメリカの諜報情報を載せた書類を「私」の小隊が奪い取ったというエピソードが最も詳しく紹介されている。「私」はこの書類奪取事件を回想し、マニラで新しく購入したアル・ヘルナンデス『Bahála Na』（1960年、カリフォルニヤ出版、マッカーサー序文）の記述を引用しながら、この事件の関与者の一

人であった自分の体験と対比させて、間違っただけの記述を指摘した後、以下のように述べている。

戦記にうそを書くのは、負け惜しみの強い日本人だけではないのであった。もし諜報員が日本軍の手に入ったことを、ほんとに報告しなかったとすれば、懲罰ものである。(中略)これがヘルナンデス中尉の手にかかると、嵐の中の決死的上陸、逮捕、脱走など、危機とスリルに充ちた物語となるのである。戦争に関して、事実を伝えるには、現地で書かれた報告書だけである。／この怪し気な「戦記」の中から読み取れるのは、次のような事実である。(後略)(二)

著者のヘルナンデスは米軍の諜報部隊に参加したフィリピン人二世であり、第二次世界大戦の勝者側の一員のはずだが、「怪しげな『戦記』」、即ち事実とは言えないあやふやな記述も残したのである。勝ち組といえども、発表した「戦記」は必ずしも信憑性の高いものではないため、戦争の事実を追求し知ることの重要性が読み取れる。

第一章から第五章までの内容を見ると、「私」は単に戦争体験を回想するのではなく、回想すると同時に資料や実地に見聞したことを通して過去の体験と記憶を確認するのである。前掲した「一兵士にはわからなかったこと、帰国してから回想を書いた時にも、知ることが出来なかった多くのことを知った」という一文と呼応して、「ミンドロ島ふたたび」では初めて知ったことや確認できたことが多く記されている。つまり、第一章は執筆動機を提示する章であり、その「知った」ことを第二章から第五章にかけて記しておくのが「ミンドロ島ふたたび」の執筆の目的だと言えよう。「私」の所属した西矢隊がどのような戦場に置かれたのか、どのように敗れたのかについて、ある程度時系列に沿って語っていくが、とりわけ資料と齟齬している部分に着目して詳しく説明するという書き方が窺える。第六章は結びにあたる章であり、国家警察との食事会やマニラまでの帰路について書かれているが、それと重ねて25年前にミンドロ島の北に駐屯していた小隊のことにも言及している。末尾に近いところ

に、「生還者は一人もなく、一切不明」（六）と書いてあり、調べて知ろうとすることの限界を示していると言える。

「ミンドロ島ふたたび」はかつての自分の馬鹿さ加減を語ることによって、そうした戦況に対する誤解や思い込みを修正して戦争の真実を追求しようとする姿勢が窺える。と同時に、かつての自分の言動に対する悔恨の意も述べられているのである。

以上が、わが西矢隊が意気銷沈して、鋸山の東方高地を越え、ブララカオ北方の山中に達して、ぶらぶらしていた間に、サンホセで行われた殺戮の概略である。（中略）われわれはサンホセでこれだけの規模の戦闘が続いているのを想像することは出来なかった。マラリヤで一日三人が死んで行く状況の中で、われわれと遠くないところで、友軍が有効に戦っているとは考えられなかったし、考えたくもなかったのである。（四）

これが戦艦「武蔵」の最期であった。呑気な西矢隊では、こんなことをちっとも知らなかった。……（六）

「私はレイテ島でよく戦った友軍に、私の命を負っているのである」（一）という事実に気が付き、戦争中「友軍が有効に戦っているとは考えられなかったし、考えたくもなかった」「呑気」な自分を思っ
て後悔せずにはいられないという心情が読み取れる。そうした悔恨の気持ちを晴らすために、「生き残った者の役目」を自問することになる。

もしそうなら、生き残ったわれわれのすることは何か。アメリカ人を一人でも多く殺して、彼等の志を継ぎ、仇を打ってやることである。生憎その後日米戦争はなく、日本列島は米軍基地で蔽われ、かつての聯合艦隊基地はアメリカの原子力空母、原子力潜水艦に使われている。ノリモン峠の狭い正面で戦って死んだ兵士の魂はこの土地に縛られており、そんなことは知らないに違いない。祖国をその状態から解放するのはわれわれ生き残った者の役目でなければならない。しかしそのために私は一

体なにをしているか。(一)

引用文によると、日本から米軍基地をなくし、日本を米軍の影響力から解放するのが「われわれ生き残った者の役目」とされている。更にミンドロ島で亡くなった戦友を遥拝する場面でも、似たような反省が綴られている。

きみたちは死んだからそれを知らなかったが、おれは生き、それを知ることが出来た。当時、フィリピンがどうなっていたか、おれたちのまわりのことをいろいろ知った。(中略)もうだれも戦争なんてやる気はないだろう、同じことをやらないだろう、
と思っていたが、これは甘い考えだった。戦後二五年、おれたちを戦争に駆り出した奴と、同じひと握りの悪党共は、またおれたちの上において、うそやペテンで同じことをおれたちの子供にやらせようとしている。(中略)私がここで戦友になにを約束したかはいいたくない。やるまではなにもいわないのが私の主義である。二五年の後、私をここまで導いた運命を、私は受け入れるつもりである。(五)

「戦友になにを約束したかはいいたくない」とあるが、恐らく戦争をなくすことと推察される。「ミンドロ島ふたたび」の執筆から見ると、大岡にとって「生き残った者の役目」とは戦争をなくすこと、戦争を知ることであろう。そして、戦争をなくすために大岡が選んだやり方とは、戦争に関する資料を調べて「知ることが出来なかった多くのこと」を知り、戦争の事実、真実に迫り、それを世間に伝えるということではないだろうか。

3.2. いい気にならないこと

「ミンドロ島ふたたび」はかつての戦争及び自分の従軍体験に関する描写に止まらず、被害者とも言えるフィリピン人の戦後の生活や、日本人とフィリピン人とのやりとりにも注目している。例えば、日本人の戦跡慰問をビジネスとし、彼らの感情を利用して遺品や骨を売買するフィリピン人が登場している。

土地の人が日本軍の水筒、鉄兜を売りに来る。認識票を持って来る者もあった。これはいやな売物である。(中略) 十字架に供物をし、読経していると、案内の若者が、両手にいっぱい骨を持って現われた。／谷間の下の方から集めて来た、という。松茸じゃあるまいし、そんなに出て来るはずはないのだが、すでに遺族は半狂乱である。(一)

日本人観光客の夜の一人歩きは出来ない。三年間の占領、特に最後のマニラ籠城の段階で、多くの市民が殺され強姦された怨みは残っていよう。しかしそんなことより、日本人が現金を持って歩くのは知られており、金が目的で狙われるという。そしてフィリピン人のやり方は、(中略) 殺してしまうのである。そして日本人を殺した人間をかくまわないフィリピン人はいないし、この国はアメリカ同様、銃砲所持は自由である。(三)

上記の二つの引用文のように、遺族の感情が利用されたり、日本人観光客が危険に曝されたりするというフィリピン戦跡訪問が孕んでいる問題が暗示されている一方、フィリピンのマイナ斯的なイメージも読み取れる。

更に個人レベルで「私」が不親切な対応をされたエピソードもいくつか列挙されている。例えば、第一章では入国管理事務所でビザ係が「ぼいと旅券を投げ返した」ことや、第五章ではフィリピン国家警察(PC)が船の手配を約束したにもかかわらず、結局最初から「私」をブララカオという彼らの管轄外の町に行かせるつもりはなかったことが書かれている。「(欺されたな)と私は思った」という表現さえ使われている。それだけではなく、フィリピンの賄賂の問題や治安の悪さにも言及し、フィリピンに関してはあまり良いイメージで描かれていないことが確認できる。

ところが、作品の末尾に近い段落において、そうしたフィリピン人の不協力的な姿や「賄賂」の風習について「私」は理解を示している。「いまの日本人には、とやかくいう資格はない」とい

う一文をもって、今まで上からの目線でフィリピンの非を批判してきた自分の立場を反転させる効果があると考えられる。

いろいろ文句をいっても、PC本部は将校一名を派遣し、ジープを鋸山まで出してくれたのである。(中略) これはフィリピン社会を動かす潤滑油みたいなもので、われわれの国も明治以前は、江戸も京都も賄賂によって動いていた。俸給はそれを予想して定められていたことを考えれば、腐敗とか悪習とか呼ぶべきものではないかも知れない。少なくとも政治献金を規正できない、いまの日本人には、とやかくいう資格はない。(六)

この段落の後に、町にいる日本人学生（関西大学経済学部からのマニラ大学交換留学生土井玉男）を登場させ、「町の普通の家へ下宿しているが、不愉快な思いをすることは全然ないという」(六)と補足している箇所がある。この補足により、不親切にされた、或いは不愉快に思ったのはあくまで元兵士である「私」だけだと暗示する働きがある。

以上の内容と並行して、フィリピン人に対する「私」の「罪の意識」や「後ろめたさ」に関する記述も施されている。

T君やI君とは関係のないことだが、元兵士には、フィリピン人に対して、罪の意識がある。われわれ戦争末期に到着した補充兵は、強姦や拷問をする元気もなかったが、自分の存在がフィリピン人にとって不愉快なものであることは、いつも感じていた。少なくとも私は不当な圧制者として来ているという意識が去ったことはなかった。そして二五年後、こんどはツーリストという特権を持った人間として来たことに、重ねて後めたさを感じないではいられない、私はそういうバカな人間なのだ。(一)

この時撮った新しいカップルの写真は、いま私の手許にあるが、花嫁の伏せた眼、閉じた口、花婿のガラスのような無表情の眼に、胸をえぐられるようである。この顔のうしろには、われわ

れの三年間の占領とその間のフィリピン人全部の苦悩が拡がっている。どうしようもない存在の重みとなって、私を脅かすのである。(三)

25年前「私は不当な圧制者として来て」おり、「こんどはツーリストという特権を持った人間として来たことに、重ねて後めたさを感じないではいけない」とあるように、フィリピン人にとって「私」は元敵国の兵士であり、ツーリストであるという特権的な立場に立っていることを明確に認識しているのである。この認識を持った「私」と対比されているのが、旅行団の日本人の団員と写真家I君である。

旅館は中国人の経営で、料理はタクロバンよりうまかった。日本人はビールを飲み、「暁に祈る(ああ堂々の輸送船)」「愛馬行進曲」を歌った。われわれとして昔なつかしい曲であるが、これをフィリピンの土地で歌うのは無神経なやり方だと思われる。一行の中の元兵士の若いボーイに対する態度は、二五年前と同じく、理由なく尊大なものであった。(一)

戦争で亡くなった日本人を追悼するためフィリピンを訪れた団員たちは、フィリピン人に対して申し訳ない気持ちを見せるどころか、旅館で昔の軍歌を歌ったり、お客様気分でフィリピン人に尊大な態度で接したりする。また、同行した写真家I君は「剽悍な戦鬪的原始人の流動的なイメージ」(五)の写真を撮るため、マンギャン人に「原っぱを駆けさせ」たり、様々なポーズを求めたりする。両者とも上からの目線でフィリピン人を見る、まさに「ツーリストという特権を持った人間」である。

以上をまとめると、「ミンドロ島ふたたび」ではフィリピン人をマイナス的に描いているようであるが、不親切にされたのはあくまで元兵士である「私」だけだとほのめかしたり、同行の日本人の尊大な態度を批判したりすることによって、日本人のマイナス的なイメージを呈している。言い換えると、自己批判によって批判対象が逆転し、元兵士という加害者であったこと、ツーリストという特権を持った人間であることを、「私」を含めた日本人に自覚させようとす

るという狙いが認められよう。

こうした「私」自身の複雑な心理を描くことで、戦争問題を含めて現在の日比両国民の間に未解決の問題がまだ多く残されていることを表面化させようとする作者の意図が窺える。決してレイテ州知事ロムアルテス氏が言ったように、「日比両国民の間で抜きさしならなかった敵意は今日、ここで消滅した」³²のではないのである。前掲した西瓜を切るというエピソードに、下記の段落が続いている。

賠償問題は解決し（上院はまだ批准していないが）、日本の商社はマニラに進出し、わざとステテコに裸足で、ホテルのロビーを歩き廻る人種は増えている。しかし戦争中一〇〇万人を殺された怨恨は、二五年では消えないだろう（一〇〇万人という数は誇張されていよう。当時、フィリピンはアメリカの植民地だったから一部は正当な交戦権によるものである。裁判手続を経ないで非戦闘員を処刑した恨みである）。／マニラ市長は大統領教書に反して、マニラ市の日本商社の活動を禁じ、新聞のコラムニストはバターンにだけは、日本人の慰霊碑を樹てさせるな、と叫んでいる。／今年の五月には二日続けて、日本大使館が学生と在郷軍人にデモを掛けられ、日本人の贈賄が抗議された。ルソン島の北端アパリから、ミンダナオ島南端にいたる賠償産業道路、いわゆる佐藤道路は汚職道路と呼ばれている。大使館の買ったての外車が、チンピラにホールドアップされた。学生は極東の防衛を日本が肩替りするのに反対している。いい気になるのは禁物である。（六）

「いい気になるのは禁物である」という一文は、高度経済成長期のさなか、戦跡慰問という名目でありながらも「ツーリストという特権を持った人間」になった日本人に向けて注意を呼びかけているのではないか。これは、「ミンドロ島ふたたび」が同時代の他の戦跡訪問文、また1967年に大岡が発表した短編紀行文とは異なり、極めて

³² 前掲 J・トーランド「憎しみも消えて “米人も参加” にうなづく島民」1966.8.19、p.14。

独特で注目を集めている紀行文となるゆえんである。

「ミンドロ島ふたたび」は戦跡訪問の紀行文で、訪問のスケジュールに沿って訪問体験を語っていくが、フィリピン社会が抱えている問題や日本人とフィリピン人の間で起こった不愉快と思われる場面を盛り込み、複雑な国際関係を浮き彫りにしているのである。大岡はこの書き方を通して同時代の日本人にフィリピンへの再認識を促そうとしていると言える。

結び

本稿では、同時代の遺骨収集や戦跡慰問という背景から、大岡の戦跡訪問の紀行文「ミンドロ島ふたたび」を検討した。戦争の部分と紀行の部分は車の両輪のようなもので、内容を展開していき、作品を支えている。大岡はこの紀行文を通してミンドロ島戦記を補完しようとするのみならず、かつ日本とフィリピンの間に横たわっている問題を表面化させようとしている。以上の考察を通して、同時代的な「協力的なフィリピン」表象からは零れ落ちてしまう部分を大岡が描写している点を明らかにしたことで、他人の土地として、かつて占領し戦争を起した場所を訪ねる民間戦跡慰問団の立場の微妙なところに気づいた大岡の反省が確認できた。そうした反省から、自分の立場をわきまえて相手国の事情をより理解し、戦争という厳粛な事実に向うといった生き残った者としての責任を果たすべきだという大岡の主張も見られる。「ミンドロ島ふたたび」は、今まで重視されてきた感情表現の問題だけではなく、ミンドロ島の実際の戦況及び戦跡慰問団を始めとする戦後問題の掘り下げという点から、大岡の戦争文学においても欠かせない重要な作品と言えるのではないか。

〔付記〕本稿は、「大岡昇平と戦跡慰問—「ミンドロ島ふたたび」に関する一考察—」（東アジア日本研究者協議会第四回国際学術大会・台湾大学、2019年11月2日）に大幅に加筆修正を加えたものであ

る。中部大学辻本雅史教授、中国文化大学林孟蓉副教授の貴重なご指摘ご助言、更に『政大日本研究』査読の過程でいただいた貴重なご意見にこの場を借りて深く御礼申し上げます。また研究調査をするにあたり、大阪大学から多大なご協力を賜りましたことも、この場を借りて感謝申し上げます。

なお、大岡昇平の作品からの引用は、特記しない限り、筑摩書房刊『大岡昇平全集』全23巻別巻1(1994～2003)に拠る。引用部の下線部は引用者が付したものである。／は改行を意味する。

参考文献

梶原譲編(1966)『第一回フィリピン戦跡訪問記念集』、東京：フィリピン戦跡訪問団事務局。

菅野昭正(1970.2)「感傷を拒む死者への鎮魂 大岡昇平『ミンドロ島ふたたび』」『文芸』、東京：河出書房新社。

木村茂(2000.12)「ジア太平洋戦争海外戦没者の遺骨収集事業——その経緯と問題点」『追手門学院大学文学部紀要』36、茨木：追手門学院大学文学部。

栗原俊雄(2015)『遺骨——戦没者三一〇万人の戦後史』、東京：岩波新書。

笹幸恵(2008.9)「戦没者遺骨収集 これでは千年たっても終わらない」『諸君』40-9、東京：文芸春秋。

佐々木誠(1970.1.16)「[本の素顔] 死者鎮魂の紀行文——「戦記より気軽に戦争描く」」『読売新聞』朝刊。

中野聡(2016.1)「追悼の政治—戦没者慰霊をめぐる第二次世界大戦後の日比関係史—(WEB公開版)」

<http://nakanosatoshi.com/2016/01/20/%E8%BF%BD%E6%82%BC%E3%81%AE%E6%94%BF%E6%B2%BB%E2%80%95%E2%80%95%E6%88%A6%E6%B2%A1%E8%80%85%E6%85%B0%E9%9C%8A%E3%82%92%E3%82%81%E3%81%90%E3%82%8B%E7%AC%AC%E4%BA%8C%E6%AC%A1%E4%B8%96%E7%95%8C%E5%A>

4%A7/ (2020.11.29 閲覧)

中野聡 (2002.9) 「フィリピン戦没日本人——慰霊の営みと戦争責任の記憶」『季刊 戦争責任研究』第 37 号、日本の戦争責任資料センター。

永井孝充 (2012.12) 「戦跡訪問と慰霊のツーリズム：フィリピン・マニラ周辺地域とインドネシア・ビアク島を事例として」『日本観光研究学会全国大会学術論文集』27、埼玉：日本観光研究学会。

日本旅行業協会広報室 (2020.6) 『数字が語る旅行業 2020』(デジタル版)、<https://www.jata-net.or.jp/data/stats/number/index.html> (2020.11.29 閲覧)。

花崎育代 (2003) 『大岡昇平研究』、東京：双文社。

浜井和史 (2014) 『海外戦没者の戦後史：遺骨帰還と慰霊』、東京：吉川弘文館。

浜井和史 (2008.1) 「戦後日本の海外戦没者慰霊：一九五〇年代遺骨収集団の派遣経緯と「戦没日本人之碑」の建立」『史林』、京都：史学研究会。

牧梶郎 (2006.7) 「フィリピンで日本軍はいかに戦い敗れたか——大岡昇平『レイテ戦記』と『ミンドロ島ふたたび』を読む」『葦牙』32、東京：同時代社。

リディア・N・ユーホセ編著、佐竹眞明・小川玲子・堀芳枝訳 (2011) 『フィリピンと日本の戦後関係』、東京：明石書店。